

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.
49

2016 霜月・師走

特集

新たな地域の架け橋 少林寺拳法健康プログラム



新たな地域の架け橋 少林寺拳法健康プログラム

金剛禪の道院では、易筋行（少林寺拳法）のほか、鎮魂行や各種儀式行事など、門信徒を対象にしたものが多い。その一方で、道院の独自性を生かし、社会貢献活動の一環として道場を開放し、地域との交流を深めている道院も少なくない。今号では、少林寺拳法健康プログラムを活用することで道院の活性化に取り組む二つの道院を紹介する。

担当／永安正樹

道院は文化の拠点

山口県・光峨眉山道院

梶野象堂 道院長

山口県光市の名刹・普賢寺。臨済宗の僧侶で、普賢寺の住職でもある梶野道院長が境内の一角に建てられ



た小堂。そこが光峨眉山道院の専有道場です。道院設立から5年ほどたったところ、「新しいことにチャレンジしたい」と思い立った梶野道院長が、少林寺拳法健康プログラム（以下、健康プログラム）の存在を知り、自治会の役員でもあったことから、会内の女性幹事に声をかけて始めました。

当初は梶野道院長自身、健康プログラムの趣旨や動作には戸惑われたそうです。しかし「印象で評価してはよくない」と、健康プログラムの指導者資格であるMC資格を取得。実際に始めてみると、道院長が効果を実感する前にあれよあれよと人が集まり驚いたとか。「当初はモニター役として40代と60代の女性二人に声をかけたのですが、あつという間にご友人を集めてくれました」

現在、主婦層を中心に平均10人ほどが、週に1回の健康プログラムに

参加されています。

発足人の一人、舞田さんにお話を伺いました。

「実は健康プログラムのお話があるまで、梶野先生が少林寺拳法の先生とは知らなかったんです」お寺のご住職とは知っていたのですが、まさかお寺の中にこんな建物（専有道場）があつて、しかもそれが少林寺拳法の道場で、しかもこんなふうに音楽に合わせて動いて……と、もう、来てみて驚きだらけで」

いつも明るい舞田さん



とにかく嬉しうに話されては明るく笑う舞田さん。舞田さんに引き込まれる形で入会されたお友達も皆、は

つらつとされています。

「近くにはフィットネスクラブや、自治体主催する健康教室などもあるのですが、健康プログラムは楽しみ方が違うんですね」とお友達の皆さん。

「既存のフィットネスや健康教室って、最終的には自分一人との闘いなんです。メニューをこなすことがしんどくなっちゃう。ところがここでは、みんなで集まることが目的みたいで『そうそう』『休みそうになっても、互いに声をかけ合って出てくるのよね』『しんどくても、そこそ手を抜きながらできるしね!』には皆さん大笑い。」

もう一人の発足人、鈴木さんは三味線のお師匠さんで、ご自宅で教室を営むかたわら、ヨガやストレッチなども趣味にされています。

肩が上がりなかつたり、膝が曲がらなかつたのが、健康プログラムで



友達を積極的に誘いしてるんです。自信を持って人に勧められますね」
茶道・華道をされているお友達も「正座が多いので、こうやって体を動かす機会が持ててよかったです」とのこと。すかさず鈴木さんが、「そのわ

改善したという鈴木さん。何より気軽に友達と集える場ができたのがよかったそうです。

「趣味つながりのお友達と集える場ができたのがよかったそうです。」
「こんな受け入れられ方も、あるんですね」と榊野道院長。健康プログラムを取り入れた結果、地域での認知度も高まり、入門者も増えたそうです。

道院内の理解もあり、幹部の澤永さん（大拳士五段）も早々にMC資格を取得し、健康プログラムの進行を務められるほか、京都別院入門の古参、沖村さん（183期生）も、今は道院の修練から健康プログラムに移って活動されています。

「道院は少林寺拳法を修練するところ、だけではないんですね。本来お寺は修行や葬儀をするだけの場ではなく、その土地の教育や福祉、文化の拠点でもあったように、金剛禅の道院もそのような役割があるのではと思っています。」

もちろん、第一に少林寺拳法あつての活動ですが」

健康プログラム中、いつも笑みを絶やさず、冗談を言っては場を和やかにする榊野道院長。

「道院の活性化ですか？ 自治会、町内会にとにかく顔を出すところから始めてはいかがでしょう。健康プログラムを実施することが目的では

なく、せっかくなつくつた道院を地域に知っていただくための布教手段として、健康プログラムは有効だと思っていますね」

道場で町づくり

大阪府・大阪八尾南道院 大森一浩道院長

八尾市立大正小学校の通学路沿いに、大森道院長の自宅兼専有道場があります。「学校の帰り道に、子供たちが専有道場に遊びに来るんです。『寄り道はあかんぞ』って叱るんですけどね」と苦笑される大森道院長。

その専有道場からほど近い修練場所、毎週金曜日に健康プログラム



大阪八尾南道院・大森一浩道院長

が行われています。

大森道院長が健康プログラムの実施を思い立ったのは3年前。健康プログラムを使って、この地でもっと少林寺拳法を広められないかと、少年部の保護者に声をかけたのがきっかけです。

大阪八尾南道院では、少年部の準備体操・基本修練を健康プログラムのメンバーも一緒にを行います。その後、少年部と健康プログラムが分かれて、道場を半分にする形でそれぞれ行うのですが、音楽をかけ、にぎやかに健康プログラムがしている一方で、子供たちは元気に運用法や演武修練をしており、自然に共存ができています。



道院修練と自然に共存



大森道院長が少年部を指導している間、MC資格を持つ幹部の山下さん（中拳士三段）が、健康プログラムを



真剣な表情で基本修練（中央が大森道院長夫人）

リードします。

音楽はお母さんが動きやすくて親しめる曲が選曲され、動きもベーシッ

クプログラムをアレンジしたアクティブなものでした。運動負荷の強い動作では上手に声をかけ、全員が手拍子でリズムをとるなど、随所に山下さんの工夫が感じられます。また、大森道院長夫人も健康プログラムに参加されており、皆さんを温かくサポートされていました。

「世代の違うお母さんが集まって、気軽に相談できたり、情報交換できるのがいいですね」という参加者の皆さん。

「もともとうちはお母さん同士、仲がいいんです。ただ、子供が塾や進学などで休眠してしまうと、親だけが道院にそのまま居続けるというのは、やはり気後れしてしまいます。でも健康プログラムがあると、それを気にせず出てこられるので嬉しいですね」

「あんまり楽しいので、パート先の同僚にも声をかけて入会してもらいました」と、その輪は徐々に広がっています。

健康プログラムが一区切りすると、大森道院長による護身術教室が始まります。とはいえ、殺伐とした空気は一切なく、笑顔の絶えないものでした。最後は少年部と一緒に法話を聞いて終了します。

「最初は、健康プログラムから入門



大森道院長による護身術教室

へつなげられたら……と考えていたのですが、違いました」と大森道院長。「これでいいんですね。このままで。道院という場で、いろんな人が集まって、好きなことをされて帰る。いろんな人と出会い交わることで、子供たちも変わっていくし、お母さん方も変わっていくようです。そして何かあったときには、自然とみんなが助け合える、いい仲間になれているんです。違う人たちが集まるからこそ空間、これは強いですよ」

「健康プログラムのお母さんが、町

内で少年部の子供たちを見かけることがあるそうです。そうしたら、町内であいさつを交わしたり、何かよくないことをしていたら注意をしたりと見守ってくれているんです。大げさではなく、町の雰囲気が変わってきたなど。僕はこれ、道場で町づくりをしているんだって気が付いたんです。カッコいいでしょ（笑）」

二つの道院を訪問して

どちらの道院も、健康プログラムの集まりが自然に道院活動に溶け込んでおり、改めてその相性のよさが感じられました。そして、健康プログラムの参加者や道院の拳士が、気負いなく健康プログラムを受け入れており、その感性の柔軟さに感銘を受けるとともに、健康プログラムであらずとも、「人」に絡む活動ならば何でも取り込むことのできる、道院の「幅の広さ」「懐の深さ」という点も、強く認識することができました。

健康プログラムや絵本の読み聞かせに限らず、少林寺拳法^{プラスアルファ}の活動をする中で、道院は相乗効果を発揮することができます。ぜひ、皆さんの道院でも、独自性を生かしたそれぞれの「+a」を見つけてみませんか。



開祖語録 ダイジェスト

1971年3月
武専卒業式



われわれを取り巻く環境、とても広大で、微妙で、だけれどもすばらしいエネルギーで対立し、調和していると、君らも思わないか。異なる二つのものが作用し合ったとき、そこに初めてさまざまな働きや現象が生じる。

人間だってそうだ。男と女、この違い、時には対立する存在が真に溶け合ったとき、新しい生命や家族の幸せといったさまざまな生み出す。でも、考え方や生き方が違えば、いつの間にか互いに気に入らなくなり、結局はいがみ合ったり別れたりということも起きます。

つまり、計算上では一足す一は二でも、人間関係の場合は、それがゼロになることも、反対にプラス何十になることもある。そして、また、そこに、数字ではない、生身の人間の面白さがある。

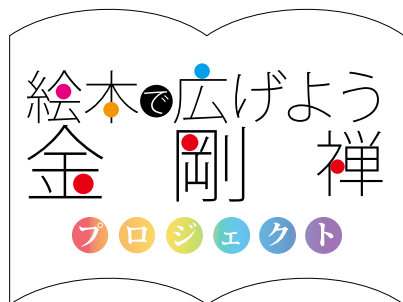
宇宙の実相を考えてみてもそうです。天地、日月、寒暖、生死、水火というように、相反する性質を持ち、正反対の働きをする事象が、この世にはあふれている。水

調和する社会を実現しよう

だけでも火だけでも、生だけでも死だけでも困るし、異なる事物や現象が存在するだけでなく、それらすべてが絡み合い、作用し合って宇宙は成り立っている。

とすれば、そうした宇宙の一存在ではない人間の考えた、しかも己の思想だけが唯一絶対正しい……なんてばかなこと、なぜ言えるんだ。という基本的認識の上に、だからこそ私は相反するも作用し合い、調和する理想の社会を何とかして実現しよう、という考えに行き着いた。でも、といって、いいかげんでもいいから妥協しろ、と言っているわけじゃない。私たちが生活するこの社会、とりわけ政治は人間がつくってきたものである以上、闘争も幸せも、どちらをどうできるかは、私たちの人間の考え方、あり方にかかっているということです。

そして、そのためには、時々刻々と変化する世界をどう認識し、だからどうしなければならぬのかを「分かつよう」「考えよう」としなければいけない。



三重津東道院

秋田ちひろ

子供を叱るとき、デイビッドがこっちを見ている

絵本『だめよ、デイビッド!』を手に取ると、ページをめくるたび、生き生きとやりたい放題のデイビッドがいる。彼の表情は真剣で力強い。自分のつくった空想の世界のヒーローで大忙しなのだ。それ故に、母親のNOの注意や悲痛な叫び声は届かない。最後に、野球ボールで花瓶を割ってしまったデイビッドの別人のような力ない表情。母親は、特大のNOを浴びせるのではなく、彼

を抱き寄せ、絵本は終わる。道院で、この絵本を読もうと決めたとき、子供たちにどんないたずらをしたことがあるか質問してみようと考えた。だが、何度か読むうちに、違うと感じる。実際は、「どうして叱られたか、意味が分からなかったことのある人は?」と聞いてみた。たくさんの子供の手が挙がった。私自身、大人の注意を理不尽だと感じた子供のころの記憶が甦^{よみがえ}っていた。道院で、子供に感情的なNOを突きつけようとしたとき、デイビッドがこっちを見ている。絵本は、決して子供に向けて読むだけのものではないようである。

今回読んだ絵本

だめよ、デイビッド!

作: デイビッド・シャノン

訳: 小川 仁央

裏表紙はNOの文字で埋め尽くされている。表紙をめくると、こんな言葉が。「デイビッドのママはいつもいう……だめよ、デイビッド! って」



「『は』と』、そう思い込んで…… 「いいね」という声が聞こえる」

その題名を、「教えることは学ぶこと」だと、ずっと思い込んでいました。林竹二さんと灰谷健次郎さんの二人で書かれたその本の題は、実は『教えることと学ぶこと』でした。

「は」と』。たった一文字の違いですが、「は」なら「教えること」と「学ぶこと」は同じこと。「と」なら、結果として結び付いていることになるかもしれないけれど、「教えること」と「学ぶこと」はそれぞれ別のこと。

元・宮城教育大学の学長であった林さんと、神戸で小学校の先生をしていたことのあつた作家の灰谷さん。その本を読もうと思ったのは、会社勤めから教師へ転職しようとしたころです。通っていた高校と校舎を共用していた高校で、林先生が授業をしたことをほかの本で読んで知っていたこと。そんなことがあつて、文庫本の『教えることと学ぶこと』という本を買ってみたのです。

先生には、教える内容以上に深い専門的な知識があること。社会に出ていく生徒に語れるように、また生徒やその親が置かれた状態を少しでも理解できるように、社会が抱える問題や課題についても知っていなければなら

ないこと。そして、それ以上に、いろんな家庭環境や個性、考え方の生徒に対しても、教育はその生徒をよくしていける、必ずよく変わる

と信じ、また接すること。そんなことが大切なのだと感じられ、先生になって少林寺拳法部をつくろうと考えていた私は、姿勢を正したのを覚えています。それまで、学校の先生というのは、授業でうまく教えるのが仕事ではないかと思っていましたから。「教えることは学ぶこと」。先生は、生徒を教えることを通じて自分が学び、そして絶えず学び続けることを大切にしている人なのだ、と思ったのです。

道院では、易筋行の修練時、先輩が一生懸命後輩に技を教えているのが、ごく当たり前の風景。自分が強くなるだけなら、技を人に知らせる必要はないだろうに。知っていることを一生懸命教える。仕事をし、道院での指導もやり、それだけでも大変だと思うのだけれど、道場を離れても、震災や社会福祉のボランティアに関わっている人が身近にけっこういます。元氣な声で楽しそうに、どんなことをしているのか話してくれるので、聞いて

いるほうも応援したくなったり、やってみたくなるのです。

中学生拳士が小学生に、一緒にボランティアへ行こうと話しているのが聞こえてきました。次の言葉を添えて。「役に立つようになったらね」。人に「与えること」が「喜びをもらうこと」。その思いが、順番に伝わってきます。

人が喜ぶことをするのは、楽しい。ありがとうと言われれば、なお一層やってよかったと思えます。未来の人のためや、遠くの見ず知らずの人のためにやることは、気付いてもらえない。喜びや感謝の声も聞こえないかもしれない。でも、人に何かしてあげること、人を思いやり、人のためになることができる、不思議と「いいことをしてあげた」と「いい気持ち」になるのは、人間（としての法）だからでしょうか。「いいね」という声が聞こえなくても、自分の心の中にある確かなもの、霊性が、「それが、いい生き方だよ」と言っているように……。自己確立と自他共楽。自己確立は自他共楽。そのことを身心にしみ込ませようと思っています。

道



道院とその可能性について

亀有道院 道院長 中林純一

1986(昭和61)年4月。金剛禪布教の地として、生まれ故郷の葛飾区亀有に、「亀有道院」を設立した。それからほぼ30年以上の月日がたとうとしている。設立当初は人が集まらず、道衣を着て一人で街中を走ったりしたものだ。もともと武道好きで、柔道部に所属していた私が少林寺拳法と出会ったのは、中学生のころ、本屋で手に取った『秘伝少林寺拳法』(光文社・絶版)という本がきっかけだった。その本に感銘を受けた私は、早速道院を探した。当時は、東京でもあまり道院はなく、ましてや中学生の身では探せる範囲も限られており、ついに見つめることができなかった。そこで私は、無謀にも開祖に直接手紙を出すことにしたのである。すると開祖から、なんと返信を頂くことができた。そして、当時の祖師谷道院(故・内山滋道院長)と大塚道院(現・東京大塚道院とは別)を紹介していただいた。ただ残念なことに、当時、事情で通える条件が整わず、諦めてしまった。

その後、働くようになって縁があり、千葉の石井宏明先生の下に入門させていただき、果たして長年の夢がかなった。入門後、少林寺拳法は私の肌に合っていたようで、非常に面白く修行をさせていただいた。今考えると、少林寺拳法のすばらしさは技術だけではなく、やはり金剛禪の教えがあることが修行を続ける要因となっていたのではないか。その後、五段が許可され、生まれ育った亀有で、このすばらしい教えを広めようと思い立ち、亀有道院を設立するに至ったのである。

今でこそ亀有は、住宅街としてマンションも立ち並び、住人も多いが、昔は繁華街で駅前はその一部では少し物騒な場所もあった。また、武道の道場もけっこうあ

り、当初は他武道からの挑戦もあって、まさに身体を張った毎日だった。その後、地元での祭りや社会活動にも参加し、次第に認められるようになり、門下生も増えてくるようになった。今この30年を振り返ると、開祖の言うように、単なる武道屋になってしまったらここまで続かなかった。単なる技の指導だけではなく、金剛禪の教えを修練に生かしながら布教し、また、門下生をはじめ多くの仲間たちに助けられ、支えられて、何とか続けてこられたのだと思う。これまでいけば苦労したことといえば、やはり仕事と道院運営との両立である。しかし、一生懸命修練に通ってくる拳士たちを見ると、とても辞めようなどとは考えられなかった。逆に、何とかして続けようとして、幾度も転職を繰り返した。おかげさまで、自営業で食べていけるようになり、道院の運営も安定してきた。

過去30年にわたって布教してきた亀有道院での活動は、今、自分が還暦(60歳)を超えてみると、やはり、健康者を中心に、自分自身に自信をつけることを中心に行ってきたという思いが強い。いわゆる社会的な弱者への、想いが足りなかったかと思いつている。そこで、亀有道院設立30周年を機に、今までこういう活動になかなか参加できなかったと思われる、障がいを持った方や高齢の方々にも参加いただける機会を、積極的につくってゆきたいと考えるようになった。近年、障がい者の方々に対する法整備が進み、社会進出も活発になってきている。しかし、こういった方々が、より広く社会で活躍されるには、まだまだその場は少ないと思う。

例えば、少林寺拳法と障がいを持った方とのつなが

りは古い。元・直島道院道院長の上田清先生が、片腕でありながら開祖に入門を請うたときに、開祖は快くそれを受け、「片腕でも少林寺拳法はできるぞ。七転び八起き(だるま)の達磨さんを見てもいい。両腕がなくても悟りを開いた」と励まされたという。開祖の創始された少林寺拳法は、本来、金剛禪運動の手段でなければならぬ。多くの人たちが幸福な社会を創生してゆくためには、そのアプローチにも無限の可能性(あり方)があってもよいと思っている。

少林寺拳法健康プログラムも、発表当時は戸惑いも聞かれたが、現在その活動は着実に広まり、各地に根づきつつある。道院にも、いろいろな活動方針があってもよいのではないかと。開祖は、「道院長は、それぞれの工夫と創意で、いろいろな布教活動があってもいい」と、布教手段としての多様性をおっしゃられていた。金剛禪運動の布教の最前線として、社会のあらゆる人々にその門戸を開いているのが道院である。親子・兄弟・祖父母と孫など、こんなに多くの人たちが共に楽しめる道は、金剛禪の道院をおいてほかにないと思う。

開祖は、金剛禪は運動体だとよく説かれていた。このすばらしい教えは、行動してこそ力が発揮される。だからこそわれわれは、開祖の残された金剛禪というすばらしい財産を、幸福運動として、継承・発展させていかなければならない。最後に、私の好きな開祖の言葉を紹介して終わりたいと思う。

強いやつをつくる必要はない！ 負けないやつをつくらばいい！ 少林寺拳法は手段！ 目的はほかにある！

宗道臣

ダイジェスト

×



志をつなぐ

坂本 龍夫 133期生
大導師正範士七段

開祖の教えを地域活動に生かす

私は、地域の方から防災の担当を頼まれ、防災士の資格を取り、地元の自主防災会を立ち上げました。私の住む地域では、いつ地震が来てもおかしくないと言われています。災害に備えることは、究極の護身術といっても過言ではありません。起きてから対処するのではなく、起きる前に手を打って、防災（減災）の手段を講じる。これは、「氣の先」とい

ます。そして、いざ災害となれば、自己確立・自他共楽の教えが生きてきます。まずは、自分の命を守るようにすること。自分が助からなければ、人を助けられません。自分が怪我をしなければ、人を救うことができます。自己確立、自他共楽が一体となっていることが大事です。

▼1976(昭和51)年、道院にて



ダイジェスト

×



道院長

vol.34

元氣の素

埼玉本庄道院

道院長 石川 奈々恵(42歳)

道院長とは、本当の幸せに氣付くことのできる存在

道院以外にも、仕事、家事、育児を両立させながら日々を送っています。あまり偉そうなことはいえませんが、道院長は、常に修行者です。これは、本当に忘れてはいけないことだと思います。修行者という意味では、男性も女性も関係ありません。楽に、適当に生きる人生よりも、常に努力し、修行を続け、そして他人の役に立てる。そういったこ

とで自身の幸せを見いだせる、そんな人生のほうが、本当の意味での幸せを感じられるのではないかと思います。「道院長」とは、その本当の幸せに氣付くことができる存在ではないでしょうか。道院長として自分が生きている、この一瞬一瞬が、すべて大切な時間です。

※プロフィールなど、金剛禪オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。



渡良瀬道院・桐生道院

設立40周年

記念祝賀会

7月3日(日)12時より、桐生プリオパレスにおいて、「金剛禪総本山少林寺渡良瀬道院・桐生道院設立40周年記念祝賀会」が開催された。宗由貴少林寺拳法グループ総裁、新井庸弘先生、桐生市長をはじめ、来賓41名、総勢173名の法縁関係者の方々が集まる会となった。

両道院は、新井庸弘、杭田要両先生により設立され、10年ごとに合同で祝賀会を開催してきた。今回、「共に歩む」をテーマとして企画。奉納演武も、アトラクションでの小・中学生による二つの団体演武も、すべて両道院混成とした。記念誌もまた、合同行事だけを取り上げた。実行委員長の挨拶は、「感謝と決意」であった。感謝は、本日お集まりいただいたこと、今

後も合同で開催できたこと、生涯を懸けられる人生の目的を引き継いだことの三つ。決意は、少子高齢化が進む桐生市での金剛禪の布教、永続への道筋をつけること、健康プログラムの市内への普及の三つである。

祝賀会は、上州名物「八木節」によって最高潮を迎えた。道院長夫人席から誘い出された総裁

も、県内道院長とともにお囃子に加わり、子供たちも一緒になって踊りの中に入った。その後、記念品の贈呈が行われ、3時間に及んだ祝賀会は閉会となった。

洛東祭2016 (石井利直)

洛東祭2016

少林寺拳法公開演武

7月17日、京都市武道センター1内旧武徳殿において、第50回洛東祭2016を開催した。

本大会は、日頃の修行の成果を発表する場、また金剛禪の布

教の場と位置づけ、道院設立以来毎年開催し、今年は50回目の節目を迎えた。

演武は、観覧者の視点に立ち、年代別に分けた団体演武や、剛法・柔法の法形を披露した。洛東スポーツ少年団からも招待演武を披露していただき、少林寺拳法の多彩な魅力を紹介することができた。

当日は、全国各地から多くの道院長とOB拳士にお越しいただいた。満席の観覧席からは、全力を出した拳士に大きな拍手が送られ、盛会裏に終了した。

愛知高上道院

山下咲雄道院長勤続50周年記念祝賀会

7月30日、名鉄トヨタホテルにて、山下咲雄道院長勤続50周年記念祝賀会を開催した。

愛知県内の道院長、拳士、友人など総勢106名が出席され、盛大で心温まるすばらしい祝賀会となった。

50年前に設立したトヨタ自動車少林寺拳法部旗と現道院旗の入場から始まり、駆けつけていただいた鈴木義孝元・金剛禪総本山少林寺代表には、山下道院長との思い出話を含めた祝辞を頂戴した。



衆議院議員の八木哲也様をはじめ、多数のご来賓にもご臨席賜り、ねぎらい・励ましの言葉を頂戴することができた。

祝辞のあと、山下道院長の半世紀をまとめたドキュメンタリーが上映され、改めて山下道院長のすばらしさとその歴史を確認することができた。これをさらに100周年へとつなげていけるよう、固く決意した次第である。(山下研治)

本山公認教区講習会

教区講習会開催報告

夏から秋にかけて、各地の公認教区講習会が、開催のピークを迎えようとしている。

近年は、一度開催した教区において、参加者の評価が高いことを理由に、翌年も継続して開催申請されることが多い。左記に、本山へ寄せられた

報告書の一部を紹介する。今回の4県は、いずれも継続開催している教区である(写真は福岡県教区)。

【8月7日】

福岡県教区……テーマを「自分を顧みる」(相手は鏡である)と定め、教学・討議・易筋行に関連性を持たせた。

【8月21日】

栃木県教区……本山教師より、情熱とユーモアあふれる指導を受け、受講者全員が清々しく帰路についた。

【8月27日】

埼玉県教区……30道院より67名が参加。

【9月11日】

茨城県教区……武専コースとは異なる視点・内容で、受講者も充実していた。(宗務部宗務課)



僧階昇任者

権大導師

■ 2016年8月1日付

菊池 厚(埼玉越谷道院)
平林 純一(東京千代田道院)
山内 靖之(高知港道院)
田中 祐二(飯塚中部道院)

中導師

■ 2016年8月1日付

坂口 伊津美(旭川神楽道院)
鳥山 武俊(大野北道院)
高橋 敏一(福井西道院)

権中導師

■ 2016年8月1日付

我妻 義人(札幌あかしや道院)

磯島 昭代(盛岡北道院)

草野 勝弘(福島双葉道院)

富山 典昭(栃木城南道院)

佐川 秀之(宇都宮東道院)

菊間 誠(渋川道院)

丸岡 正行(埼玉深谷道院)

玉田 茂(埼玉行田道院)

山本 輪一(市原道院)

岩田 浩明(市原東道院)

重富 朝暉(杉並永福道院)

石原 文顕(東京成瀬道院)

植田 真悟(南中野道院)

佐藤 真一郎(町田山崎道院)

渡辺 晃匡(東京飛鳥道院)

内田 和夫(東京飛鳥道院)

田中 亜津子(西多摩瑞穂道院)

小山 恵子(西多摩瑞穂道院)

横山 知永(東京大塚道院)

日野 勝利(横浜戸塚道院)

佃 俊幸(厚木道院)

吉田 泰彦(厚木道院)

山口 直樹(小田原道院)

小山 実(横浜本郷道院)

多田 晴夫(横浜本郷道院)

佐久間 恒雄(横浜鶴見道院)

田村 真人(相模原南道院)

勝俣 信行(箱根仙石原道院)

篠原 路代(川崎稲田道院)

山下 敏幸(遠江中道院)

脇山 和希(愛知高上道院)

前嶋 千恵(四日市道院)

落合 孝章(三重久居道院)

岡崎 栄(明石東道院)

西田 博昭(木津道院)

吉田 郁恵(鳥取西道院)

谷 佳典(貞光道院)

尾崎 健(貞光道院)

田村 茂人(徳島国中寺道院)

武田 尚文(徳島国中寺道院)

藤田 香菜子(徳島国中寺道院)

山田 哲朗(長崎浦上道院)

中村 哲彰(長崎有家道院)

法階昇格者

准範士

■ 2016年9月11日付

丸山 平之(八代道院)

水窪 慎一(熊本玉名道院)

下野 幸夫(薩摩山崎道院)

お布施

設立50周年記念

▷ 東京錦糸道院 八巻哲……………80,000円

本山帰山記念

▷ 名古屋東道院……………100,000円

▷ 金沢卯辰山道院および拳士会……………20,000円

▷ 愛知梅坪道院……………20,000円

▷ 葛飾西道院 嘉野松生……………10,000円

▷ 三重久居道院 小河清昭……………10,000円

▷ 高砂道院 大内信弥……………10,000円

▷ 壬生川道院……………10,000円

公認講習会

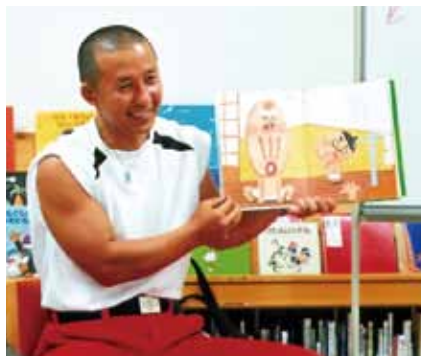
▷ 福岡県教区……………30,000円

訃報

みやわき こうじ

宮脇 功次 小野田道院道院長、152期生、大導師 大範士八段、2016年7月27日逝去、満74歳

金剛禅講習会(少年育成)のご案内



「絵本で広げよう金剛禅プロジェクト」顧問の三浦伸也氏(写真)による、同プロジェクトの可能性に関する講演をはじめ、現在同プロジェクトのモデル道院から、具体的な方法とその効果に関する発表もあります。そのほかにも、本山委員による少年育成に関する講話や、現場で生きる指導法をご紹介します。これからの将来を担う子供たちの指導に当たっている道院長や幹部の方はもちろん、少年拳士の指導に関心のある方はぜひご受講いただき、よりよい道院づくりに役立ててください。

◆日時：12月3日(土)8:45~18:00

4日(日)8:30~15:00

◆場所：金剛禅総本山少林寺

◆対象：16歳以上かつ初段以上

(連盟会員も受講可)

◆受講費：10,800円

(税込み、昼食費を含む)

◆特典：武階・法階の対象講習1回

武専追加出席1日

(ただし、全日程受講に限る)

2017年表彰式・認証式

2017年1月7日(土)

2017年新春法会・稽古始め

2017年1月8日(日)

いよいよ来年は、少林寺拳法創始70周年を迎えます。

道院の皆で新年を祝い、一年の精進を誓い合しましょう。

そして、元気に初稽古に参加し、同志とともに清々しい汗を流しましょう。

稽古のあとには、楽しい「ぜんざい会食」もご用意しています。

ぜひ、皆さんの帰山をお待ちしています。



編集後記▼9月某日、震災のため延期されていた九州地区での道院長研修会が、熊本県八代市で行われました。あれから5か月、震災の傷跡はまだあちこちに残り、復興への道のりはまだ半ば。それでも、熊本をはじめ九州各県の道院長の皆さんは、声をかけ合い、励まし合い、「元気出していこうや」といったふうでした。▼ここ数年、日本は地震だ豪雨だ嵐だと、大きな自然災害に見舞われ続けています。力を合わせて援け合うことの大切さや、ふだんからのつながりの大切さが、ますます必要になる社会です。▼道院には、拳士同士の「絆」があり、拳士にはそれぞれの「縁」があります。縁を生かして、さらなる絆をつむいでいく。その絆からは、さらなる縁が生まれていく。そんな絆と縁とのいい循環が、道院を拠点にどんどん生まれればと思います。(さ)表紙 紙▶三野 智大 北海道出身。専門学校札幌ビジュアルアーツ卒業。2016年3月より「ダーマ」をテーマに『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。正拳士四段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶

<http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/>
代表法話をはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅

検索

あ・うん vol. 49
金剛禅総本山少林寺広報誌 2016 霜月・師走

2016年11月1日発行(奇数月1日発行)

発行人：大澤 隆

発行所：金剛禅総本山少林寺

〒764-8511

香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48

☎0877-33-1010

<http://www.shorinjikempo.or.jp>

編集人：坂下 充

印刷・製本：牟禮印刷株式会社

広報誌『あ・うん』追加発送について ◆◆◆◆◆

現在、広報誌『あ・うん』を、1道院につき門信徒10人以上の場合12部ずつ、9人以下の場合10部ずつ、一般財団支部は1部ずつ、毎号ご提供させていただいております。更に追加をご希望の方は、本山宗務部にお申し出ください(追加1部につき50円・送料別途要)。

TEL.0877-33-1010

e-mail : aun@shorinjikempo.or.jp

一期一笑



イラスト／大原由軌子

愛知高上道院 黒瀬 一輝

リーダーになれ！

私たちの道院では鎮魂行のあと、道院長が必ず法話を行います。ふだんは元気いっぱい、やんちゃ盛りの少年拳士が、このときばかりは集中し、真剣に耳を傾けています。時には開祖との思い出、時にはニュースや論議など、とても幅広い分野を題材に、子供にも分かりやすい言葉で、法話をしてくださいます。

そして、法話の最後には必ず、「いいか、少林寺拳法をやってリーダーにならんか」という言葉で締めくくられます。

そこには、法話を通して拳士の心に種をまき、水をやり続けて、大きな花を咲かせようという、道院長の強い思いと、大きな愛を感じます。

今年、愛知高上道院は、設立50周年を迎え、記念パーティーが開催されました。山下道院長の下で修行し、今では道院長として活躍される多くの先生方が出席され、山下道院長の教えが連綿と続いていることを、その場

にいた門下生たちは実感しました。また、道院長になられておらずとも、まさに実生活の中でリーダーとして活躍されている方も大勢いらっしゃいました。

私たちも諸先輩のようなリーダーとなるべく、ふだんの修練において工夫をしています。例えば少年部の拳士に、みんなの前で1分くらいの話をしてもらいます。最初は、もじもじと恥ずかしがっていたのが、だんだんと話ができるようになり、いつの間にか堂々と話しをするようになります。一歩ずつ、リーダーに向かって成長してゆく姿を見ると、少林寺拳法はとてすばらしいなあと実感できます。人に会い、人から学べることは、すごく大切な、そして幸せなことだと思っています。

これからも、山下道院長の教えの下、6歳から65歳までの老若男女が、人生のトータル修行を行いながら、それぞれの立場でリーダーを目指して日々修練してゆきます。

投稿大募集 道場や拳士のちょっとした話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒764-8511 香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48 金剛禅総本山少林寺 広報誌担当宛 TEL.0877-33-1010 FAX.0877-56-6022 e-mail : aun@shorinjikempo.or.jp

Ryu Oh Ken, Morote Wanuki



宗門の行としての少林寺拳法

りゅうおうけん もろて わぬき
龍王拳 諸手輪拔

諸手で腕を捻じらんと、または担がんとしてきた際、相手の動きに逆らわないよう足を捌きながら鉤手守法を行う。当身した手を鉤手の先に添え、支点をずらさないようにしつつ、我の肘を相手の両腕の輪の中に差し入れるようにすると抜ける。同時に小手抜・寄抜を行うイメージで大きく抜くとよい

撮影／加々見一 文／永安正樹 演武者／守者：倉本亘康 准範士六段 攻者：富田雅志 大拳士五段



SHORINJI KEMPO
少林寺拳法